



雪北出羽路

九



登	6113	登	85-14
函	442	函	4-2
番	19	番	/

雪北出羽路

九卷

平鹿郡

九卷



平鹿郡

雪のそはぢ

九卷

本郷

植田村

門田のきなり

寄郷拾二村

おろしづ

越前邑

花の八千草

別明邑

里乃きう橘

海蔵院邑

稲葉の露

谷地新邑

間野はま清水

志摩新邑

雀小柳

西野邑

はるれ旭生

今泉邑

さる谷

常野邑

やちやま

下塚邑

下と柳

源太左馬邑

きとれ下つ

真木邑

日かげのめみ

木下邑

秋田縣立
横手分館

6514
442
11

植田邑

里長

莊兵衛

殖田^{ウヰダ}上田^{ウヘダ}と書し事^{カキ}より殖田^{ウヰダ}を姓^{セイ}ある見えり此村東を越

前村西を谷地^{ヤチ}新田^{ニムタ}村南を志摩^{シマ}新田^{ニムタ}村北を木下^{キジタ}村に植田^{ウヰダ}の南を

皆瀬川^{ミナセガハ}より東より流る御膳川^{ゴダナガハ}に入る 享保郡邑記の家負七

十四軒村の古館あり昔城主大石興九郎住居と云南に

雄勝郡南前村川を境と見えり枝郷 田野 羽

場 高口 堀米 上二橋 下二橋 呼澤 北澤

沼尻 福嶋 八日市^{ヤチノチ}此三村の小村あり此内園点々を

敗村あり九村を今残りたる本郷植田^{ウヰダ}寄會^{ヨリカウ}郷十二の邑は

りそら 越前村 海藏院村 志摩新田村 今泉村 下堀村

真木村 別明村 谷地新田村 西野村 常野村 源太左

大正拾五年三月拾八日

馬村 木下村云々

村三社の神あり其々々々々々 熊野権現 古聖宮

八幡宮云々云々云々云々 熊野社云々云々

神云々

熊野権現宮

別當田野村多寶院

此神を村の南に鎮せり今を神教もあはれをてく道祖
神の雄元手酬奉るはて外に神おはしげもあきまどふ
ろくしりくは繁榮奉り神名も熊野山補陀洛寺と云社
僧とともありはるしきも此神社の開闢はつづきの代
づねのやまの事なまじり享保天文はころら神教
七間四面あきまどふを盡くみぎさ建られ代々鼓の城主は

鎮守の神を弘治永祿の頃大石駿河守の男同苗興九
郎藤原定景とて信て決まじりや鼓城主駿河守神供
神事料とて鈴振田笛吹田あどい田地両三ヶ所の神田を
て廿餘斛の禾田を寄附られしきも古老の物語に傳ふ
是考へおまの倭漢三才圖會出羽國部権現宮在平
鹿郡吉田村は領二十石と見えりこれに植田を上田と書つは
ころ見誤記なり此吉田ハ本一郷ありが上中下と今ハ三村を合
たり此三吉田を権現宮とてさるおそく宮を古くも今も
聞えぞ中吉田ある藤根の辨財天女祠のりりその三才
圖會の撰者浪連の寺嶋良庵に良庵ハ山本郡能代港
の産伊藤良玄の弟子とて圖會編輯の時天象部も出羽

國部を醫國家佐藤良玄誌^{カキ}より良玄の玄孫なる伊藤八兵衛^{屋張ハ}

能代^{ノミヤ}の物語の委曲^{ツヅミ}を聞えり良玄は此秋田より大坂^{オオサカ}に居住^スする

くはし^{ハシ}て出羽^{デッポ}の庄^{シラ}人^{ヒト}ありつるを聞かれ^{キコ}村^{ムラ}どゝおかれは近^{チカ}く

お^{ナラビ}並^{ナラ}る^{ナラ}植田^{ウエタ}を言^{コト}田^タと^ト思^{オモ}ひ迷^{マヨ}ひ書^{カキ}謬^{マダシ}り記^シしおけられ^ケる

了^{マツ}そ^ソ何^{ナニ}の^ノ事^{コト}と^トい^イつて^ツも^モく熊野^{クマノ}權現^{ケンゲン}を往^イ古^コより遷^{ウツリ}し奉^{ホウ}る^ル神

とい^イふ^フも^モく尊^{ミコト}き^キ神^{カミ}と^ト延喜^{エンキ}式^{シキ}の紀^キ伊國^{イノクニ}年^{ネン}表^{ヒョウ}郡^{クニ}熊野^{クマノ}早

玉^{タマ}神社^{ジヤ}由^ユ是^{コト}以^モ速^{ハヤ}玉^{タマ}男^ヲ事^{コト}鮮^{セン}男^ヲ伊^イ弉^サ圀^ノ三^ミ神^{カミ}為^{ナリ}熊野^{クマノ}三^ミ所^ノ權現^{ケンゲン}と

見^ミえ^スす^ク古今^{コキン}皇代^{スミヤカノヨリ}圖說^{ツゾク}云^{イハ}崇^{タカ}帝^{ミカド}六^ム十^{ジュウ}五^ゴ年^{ネン}始^{ハジメ}建^{タテ}熊野^{クマノ}本^ホ宮^{ミヤ}

景行^{ケイコウ}帝^{ミカド}廿^ニ八^{ハチ}年^{ネン}建^{タテ}熊野^{クマノ}新^{シン}宮^{ミヤ}と見^ミえ^スる^ルま^マ書^シ記^キに伊弉^{イサ}冊^{ソク}尊^{ミコト}

生^{ウマヒ}火^ヒ神^{カミ}被^カ灼^{シヤク}而^{シテ}神^{カミ}退^{ヒノグ}去^サ葬^{マタス}於^ニ紀伊^{キイ}國^{クニ}熊野^{クマノ}之^ノ有^{アリ}馬^{ウマ}打^{ウチ}花^{ハナ}ノ時^{トキ}ハ亦

以^モ花^{ハナ}祭^{マツル}又^{マタ}用^{モツ}鼓^{ツヅミ}吹^{フク}幡^{ハタ}旗^{ノボリ}歌^{ウタ}舞^{マシ}而^{シテ}祭^{マツル}ルと見^ミえ^スる^ル今^{イマ}も緹^{ツツミ}旗^{ノボリ}を^ヲよ

そ^ソう^ウな^ナも^モな^ナを^ヲ花^{ハナ}の^ノ窟^{クハ}と^トい^イふ^フは^ハ此^{コノ}植^{ウエ}田^タに^ニ古^コ城^{シロ}を^ヲ小^コ鼓^{ツヅミ}

ノ^ノ柵^{セキ}と^トい^イふ^フ神^{カミ}田^タを^ヲ鈴^{スズ}振^{フリ}田^タと^トい^イふ^フ由^ユ吹^{フク}田^タと^トい^イふ^フ田^タ地^チの^ノ字^ジあり

也^{ナリ}由^ユ来^{キヨミ}ある^ル事^{コト}と^トい^イふ^フ也^{ナリ}也^{ナリ}也^{ナリ}此^{コノ}熊野^{クマノ}の^ノヤ^ヤち^チも最^{モト}上^{ウヘ}の^ノ事^{コト}

に^ニ災^{サハシ}て^テ後^{ノチ}を^ヲ伊^イ社^{シャ}と^トい^イふ^フは^ハと^トい^イふ^フと^ト見^ミえ^スる^ル事^{コト}の^ノ事^{コト}の^ノ事^{コト}

熊野^{クマノ}の^ノ七^{ナナ}本^{ホン}杉^{スギ}と^トい^イふ^フ幾^{いく}世^よ経^へる^ル中^{ナカ}の^ノ三^ミッ^ツう^ウと^トい^イふ^フ事^{コト}の^ノ事^{コト}

七^{ナナ}本^{ホン}生^{ナマ}ひ^ヒて^テも^モ天^{アメ}明^{ミヤ}の^ノこ^ころ^ろあ^あむ^む推^{おし}倒^{たふ}し^シて^テ今^{イマ}も^モさ^さや^やあ^あり

是^{コノ}も^モさ^さや^やあ^あり^リの^ノ事^{コト}の^ノ事^{コト}と^トい^イふ^フ二^ニ三^{サン}本^{ホン}を^ヲ残^{のこ}り^リて^テか^かむ^むさ^さび^びと^トい^イふ^フ

こ^この^ノ事^{コト}の^ノ事^{コト}と^トい^イふ^フ伊^イ社^{シャ}を^ヲい^いた^たつ^つふ^ふま^まさ^さと^トい^イふ^フ事^{コト}の^ノ事^{コト}

奉^{ホウ}り^リて^テあ^ある^ル事^{コト}の^ノ事^{コト}と^トい^イふ^フ見^ミ奉^{ホウ}る^ルハ^ハ恐^{おそ}き^き事^{コト}の^ノ事^{コト}此^{コノ}神^{カミ}社^{シャ}を^ヲ近^{チカ}き

小^コ興^{キョウ}と^トい^イふ^フ三^{サン}月^{ゲツ}十^{ジュウ}五^ゴ日^{ニチ}は^ハり^リ花^{ハナ}の^ノと^トい^イふ^フ春^{ハル}祭^{マツル}と^トい^イふ^フ花^{ハナ}を^ヲ手^テ酬^{ウラナフ}は^ハり^リ小

鼓^{ツヅミ}の^ノ城^{シロ}蹟^{アト}の^ノ事^{コト}の^ノ事^{コト}と^トい^イふ^フは^ハり^リ鈴^{スズ}振^{フリ}田^タの^ノ初^{ハツメ}徳^{トク}

笛吹田に初禰もて神酒あかきし河鰐をもさげいしは
み神を齋き奉りて今し世までの蒼生のをさすは罪過を贖ふ
と保長近野氏志を起し村の人々進み別當多寶院あるを
しをはげし諸人の助力を得て神を崇行奉らば君の萬歳を
いりまむ村民の子孫常え千所の稲のハ東穂ふちをひあへ事を
いりまむやうりうなる世ありがごとくあはしにすあはれ
古四王宮

甲秀山古四王寺あり此寺いしは社僧をもさや古四王社と
むら雄勝郡水瀬川の邊り河熊今角田村の西北の方中て福嶋
此福嶋雄勝郡手宮郡兩部入會の
村あり雄勝郡の角田村とも名ありとふ村あり小高き地鎮座し市神とてその
いりまむし創めを知らず人あしむし其邊をいと廣くお居も多

くりしと水のあめあ皆瀬の河岸ミか山爾頼て古四王のはもうちあは
し修理する人もあはし神像もあはし出て夏は堂の火をとを
破堂ありぬはる水禄元年の秋植田小鼓の城主大石典言九郎
藤原定景此あり小鷹狩して分めり此木像をあやこ見て
神の侍りありまれかる草原雨露あぬれ神形や朽ちむ悲
事とて近きて見奉れ此の向きてませりはさく是を古四王
権現のそがしやはしりてそありまると清き草れ葉を
包とて従者あ持せてやむ城を守護奉りていし日あはれ小
鼓の城の辰己に隔ある処を堂を作りて安置まつり今つ多門
天王の尊形といし此毘沙門天と四天王の其一柱あはれ古四
王宮とまを奉りて日々繁榮參詣道もさうあえを賑ひり

しを文祿の手慶長の始なり最上義光の軍に落城め城の火く
りて古王殿もあやうければ多寶院の三世當る高勝坊兵火の
中へ飛入りこの古王に尊像を命のけしなりなりて小鼓の城を逃
出て山里へ潜みかくる身を生きて世の乱をくづりしうば植田の立飯
り来り知れぬ人へ進め一紙半銭の志を得て目を積し月重
り年を経てぬくび古王殿を宮と達し高勝坊の勲功の
出現ありつる葦原の雄勝郡の田と郷と今もその字を下居
田としり此古王宮といふより平鹿郡千屋庄三嶋郷殖田村の
鎮座の御神あやま秋田郡率浦庄高清水岡秋田郡今よりす此地
に遷齋奉りし御神あやまのゆゑ知る人あらず古王は雄
勝郡益内庄中村枝郷下樺山村の古王神殿向埤古社は仙北

郡小貫高畑村の古王宮秋田郡寺内高清水の古王宮山本郡寺内
杉清水の古王宮あはれその外あり聞えりそもく聖徳太子建立
あり護世四王寺法隆寺平八院の外ありとく多しまた越後國
蒲原郡五十公野の古王宮あり其里に傳ふに神武天皇より
十代崇神天皇皇子四人ありす中へ大彦尊をもち高志
國を鎮護め給ひしゆゑに此尊を齋して古王とよまをさす
たゞ此神を古王といふは越王のておはすといふれども今ハ
真言宗の寺にあり侍ればさなりて唯四天王を祭るに
てアセバ恐き事なり大彦尊の勲功も世にあはれひてかく
ろひてぬゆゑなりあはれ侍る人語り今高清水
の岡に在る古王宮といふは菅野とよふ廣野といとく大はれ

堂舎少でありしと思れり日本後記十九卷に天長七年正月癸卯
に羽田國驛傳奏云今日三日辰時大地震動如雷霆城郭官
舎並四天王寺文六佛像四王等皆悉顛倒城内屋什擊死百姓
十五人支體折損之類一百余人云地之割辟甚多大河盡流
細如溝云見えあり今神田水口ありと云ふ処ハ云々菅野某の
内云水口の枝郷ハハ幡田といふ所あり此村の田地の字ハ大佛
殿併名殿常樂寺浴室前等所抑所堂所政所國常坊云
といふ名ども残りしを云てぞかれと知れり云々此村變化する
此古田王の云々とありといふし云々大なる荒れありしも知りか
此植田の古田王の神形ハ多羅と云ふ木を以て制作しなれハ植田
村のその此多羅の木といふところハ新おとも用事ありといふこ

れをおもふ聖德太子宇屋大臣と戦ひのとき秦河勝ハ何れ
勝軍木を以て四王の像を作らせ官軍勝を得て後ハ堂を作せ
これ四王を安置して護世四天王といふといふその勝木ハ云々
多羅木ハ云々といふれといふ云々似たり此古田王の旧跡ハ古柳ありそこ
より涌出るを柳清水といふ秋田郡の清水古田山本郡の清水
カ古田王此柳清水の古田王の古田王と云々といふ云々似たり柳清
水ハ高野川と流れ云々これ四月八日を大祭あり此神はの前
リハ市立て賑ひ云々ハ今も八月市所の名あり大祭あり云々八月に
ハ市立し事とその世をおもふれ云々あり云々一度ハ小鼓の城あり
つ云々云々古の八月市植田村の村かうつ云々云々神はを熊
野神社と後會ハ北向の神に祭日四月八月古田宮ハ植田越前海藏

院志摩新田源太左馬此五箇村の鎮守ニ末社

神明宮

寶曆十四年
棟札をもちこり

雷社

別當多寶院

八幡宮

あるはふじ梨の花
さくさくし田北作
ありぬふし
なり

此植田村の羽場といふ地は高サ六尺余廣サ三文の古墳
あり其墳の上ハ大なる梨木一本生ひたり此木を人皆飢餓
梨といふその梨花を事希くす此梨の花咲歳ハ秋の田稻と
すこれり豊年のあるは花をさし威をいふも世の業やハけ
れはち飢渴梨とをいふなり天和元年壬戌春三月廿日此事
あり
佐竹右京大夫義慶公杉宮御参詣の道中此塚に
いさる塚ぞ由来ある塚やと古老のものをめりて問を給ひし
その齡百をせよと治右衛門といふ翁杖を捨て土を手をす

て申上る此処よりより申上るよりよりいかに上り下りの所を二
日市々市立し世々市神祭する處と申さふりぬとす此數
城所祈禱の老のや熊野權現の獅子頭を舞ひます今泉
城の祈念も妙なり西村墳に獅子舞いさふいし処を獅子崎と
申さふりぬとす其梨木は某の年経くる木なりさふりぬとす
む老くるものもさくに知るはすいふをさふ公のいふやうに
此塚をあらき平げて見ればさうりから内かゆきやあむ
とやむり馬さうりぬとす四方見やり行き過ぎ信ふさ
ばとて十人斗の荒雄等鉏鍬きてこの梨木塚をあらきて見れば
公のいふやうに梵形の石碑あり堀り出たりそハ大日如來
愛摩明王弥陀佛勢至觀音の種子をもたててあられし

を疾くはせつゝ途中より多くをい上れり神神は神座より
め神と齋よりと公れ仰はりしにやう神樂を奏し湯を
託宣を待み弥陀佛の種子あり弥陀と本末八幡大菩薩に
鼓落城の後埋れしをいとも人ともぬと恐れし事といふ
明正徳元年辛卯六月神社を建ぬその頃多寶院の世
寶勝院宥錦代に祭日八月十五日と定めまはち宥錦を別
當とせり別當多寶院

末社 諏訪明神

多寶院累代

上祖々江家よりて委曲ありねど藤原資次を以て鼻祖とせ
其ゆゑら古き神樂太鼓の胸の内より大檀那大石氏定景所寄

進天正二卯正月七日羽州平鹿郡植田村熊野山別當藤原氏兵部
太夫祐次作之と書くを證とせり

二祖多門兵衛藤原元興天正十年壬子正月十五日行年六十四歳卒
去前の世代より元興を上祖とせりを認り

三世多門兵衛定興より小鼓の城主大石駿河守藤原定宗男
大石典九郎定景の舎弟大石一角藤原定興神職となり熊野北
家を龍ぬ天正十七年己丑十二月九日卒去

四世高勝坊北高勝坊より修験道に入り入峯修験ありて後氏
優波女塞の家全く備り万治元年戌戌八月廿三日六十九歳遷化

五世多寶院清園寛文七年丁未十月廿七日遷化 六世寶
勝院宥錦元禄元年戌辰八月十五日六十九歳化 七世多寶院

宥清寬保二年壬戌七月七十三化 八世龍藏院宥聽寬保三年
癸亥十二月廿九日化 九世善識坊宥流明和二年乙酉十月廿六
十三化 十世多寶院宥演文化四年丁卯六月廿三十八化 十
一世龍藏院龍明文化六年己巳五月廿七日化 十二世現住雲隨
坊永泉代々熊野權現古四王宮八幡宮三社の別當職之

延壽院累代

開祖文殊院遷化年月不知 二世院号不知現心正德四年
甲午三月十二日化 三世法重院文觀享保三年丁未九月廿六日化
四世延壽院快通明和七年庚寅七月十三日化 五世玄淨坊快
林天明四年甲辰六月三日化 六世林章坊快珠同年八月廿四日
化 七世法重坊快相同年十二月十二日化 八世延壽院宥通文化

十二年乙亥三月六日化 九世當住延壽院了坊快英代 上祖より
無假住無別當の家ありといふ

護昌寺歴世

王秀山護昌寺ハ曹洞派より相模国足柄郡小田原郷早河村の
海藏寺の末院ニ開祖を海藏寺三世大州梵宇和尚大永五年
乙酉八月廿四日遷化 二世通庵英徹和尚享德元年壬申十月
廿三日化 三世盛岩 育和尚遷化年月不知以十五日供茶花
四世北州和尚万治三年庚子三月二日化 五世月洲和尚元禄七
年甲戌三月廿七日化 六世交屋易卓和尚元文三年戊午四月十
九日化 七世恒山藏一和尚寶曆四年甲戌十一月十二日化 八世大
安魯光和尚元文五年庚申十二月十二日化 九世益州萬江和尚

元文三年戊午八月廿日化 十世通山北吾和尚享保十九年甲寅八月
十六日化 十一世雲外高峰和尚寛保元年九月廿七日化 十二世紹
印寂立和尚安永三年乙午三月廿八日化 十三世坦然無等和尚寛
曆十三年癸未五月廿日化 十四世透屋祖閑和尚寛政二年庚戌
十月廿九日化 十五世實道可參和尚寛政七年乙卯十月六日化
十六世活水坦龍和尚文化八年辛未三月十五日化 十七世陽山
德隣和尚文化十年癸酉二月十八日化 十八世圓海頓禪和尚文
政元年八月花園信正寺移轉之 十九世威山金猊和尚文
政元年戊寅八月廿二日湯澤東山寺晉山 廿世悟峯良道和
尚當時現住之
此寺の鎮守神明宮むし高橋庄右王門の齋すと祭日七月十六日之

植田と表所裏所ありて一の城下と云ふを東西北所ありて南北に
往復せりすこ表所より裡所へ通ふ小路ありそを衝母貫筋と云ふ
此處ありむし一れ馬場の跡といひたりまゝに市所ありむし一れ古
四王の祭と云ふに市ありし事前にも云ひしと越前村と入相の交
るよりわちある植田れ名を有ける植田を酒れ名産ありて六郡に
類するありし 高橋氏十三代に兵右衛門今源右衛門といふ小鼓
の城ありしところれ家といひしより表所あり七代先ある兵右衛門
隠居して玄光といふ此玄光家の前なる寒泉をいふ大やうな造
り田井ありたりけるより玄光清水の名今れ世にけり流れぬ
高橋庄右衛門今庄兵衛といふ舊家こころも表所あり酒
肆といふあり表所より 近野孫右衛門といふ家あり近野士家

の祖家といふつゞきも此三家を植田村の旧家といひ 此植

田は枝郷も古土村ありといふと 高口^四 田中^三 堀米^{ホリゴメ} 戸^四

福嶋^六 此四村を退轉^{タウゼン}するなりを傳ふ享保日記に下堀村

は伴ふ福嶋川々先年田畑をもちあり貞享四年米女川と申

へ田畑押し切大川向ふ成り今々畑けり云々を見えり堀米村

米女といふ人ありつゞきも諸りその米女といふ人あり

八日市村

八日市を植田村ある郡邑記に枝郷に部入し亦枝郷といふ

つゞき越前村植田邑の村民入令の処に 熊野神社 古聖宮あり

ト杉の林後會ふ南をむ向きて鎮座り古聖宮に祭八日毎

市立し事前^{サキ}に古聖宮のくぐり小委曲^{ツヅミウチ}を云ひつゝ

田野村

郡邑記に田野村家負五軒^{享保}と見えり今々修験多寶院戸

あり其家との跡々田と云ひけり此田の中路より古聖宮の前^{タテ}直

つゞき

羽場村

享保日記に家負四拾八軒今世戸といひ羽場は他所^{コトトコロ}に羽立と云

ひ新塾^{シンジュク}ある地と云ひて近き創^{ハジメ}の村を云ひつゝ羽場端^{ハバ}羽幅^{ハバ}

拾^ヒとれ字も書^{カケ}りて絹布^{ヌイロ}を云ひはるはり乃省^{ハス}諸^{カレ}といふ

玉勝間云堀川院百首ふぬきかけぬと誰とも云ふ

此をれか多きは藤袴^{フジマタ}のれこあるなり一本一日市と云ひ云

古田^{タラシ}勝^{カチ}か一日市とてむつゝ一日こやふ市といひ事前^{サキ}にも云

此は東四の村より上羽場と東下羽場と西中とをむし
大なる葭原より人々栖むし文祿のころを雄勝郡湯澤城
主より最上義光の家臣楯岡豊前守満茂落来り此処を身
を潜て土民より田舎を其後胤柴田藤右衛門と下羽場
村ありあてて柴田統多より上祖楯岡より頼むむ
この藤右衛門の家は先祖楯岡所持の武具をてり今をりや
あやうきあき大小ををりといふより親鸞聖人此奥翰のあ
多佛ありいづれをよりいり此邑水上へ雄勝郡岩崎の田中
ある葭嶋とあてられ清水をいれり田の佃め言子保のころより
家負四拾八軒今を廿四戸をりけは

八幡宮祭日八月十五日社末 諏訪大明神 淡嶋明神 此社を近き
双子

上ニツ橋

言保のころの家六軒今を八戸あり越前村入會の村を其村人多し

下ニツ橋

此邑本家八軒今を六戸あり 守子清水と名水ありそのより
まか真那板倉より清水より此真奥板倉よりなる名ある雄勝
郡杉宮にも真奥板倉といふ泉ありその真奥板倉より二本流り
此細流より初鮭のあはれ登り来るを捕りて杉宮明神の御贄
に奉りしといふ事ありこれ事あり羽黒山にも鬼包丁といふ事あり
まが今を豆腐代りよりかきあはれなるありこれ二ツ橋の奥
奥板倉祖産をよりなる処ありこれ真名板倉の水は流を石持

川といひて源太左馬村の石藏かかりまゝ今宿村の高花といふ里の
流れ沼館の邊より伊豫川の落をいひ地下二橋の市之野といふ
旧家あり此家より越前守の佐藤善右衛門の家へ堀入りせりなる
がうら越前村のくぐりありまゝ丹平ゆゑ家もあじがその
後あり丹代々荒井八左衛門はじめて此家へ来りたるべしといひし
屋戸こ

呼澤

あゝと云ひり

享保日記の家四軒今三戸あり北の木下村あり呼ひ澤を杉の寺といふ
ふこむらゝ木と深くてそこと一見えりひ呼會ひり名あや山木郡
仁新の奥の嘶の澤といふありそゝ鬼麻毛といふ駒此牧の産れそ
処を今鬼神と鬼麻毛が嘶といふ澤といふふきとつりしりバそをいふ

へ澤といふふひ澤いばへ澤似る名こ

沼尻

沼尻村古家負土軒今土戸 薬師如來をせりそこをいふとひし
まゝいふといふ此薬師佛ハ草薺を煮て煉制作りける佛像といふ
よりまた稻葉といふるを都れ因幡薬師を慕ひける處ありし
祭日四月八日こ

北澤

此北澤村々享保のころも家二軒今も二戸本ハ平石門今ハ文助とて
住ぬ

竹篠澤村

志野澤村此邑享保日記の見え今家三戸ありとある書に云

とある地々うろく一帯とあり

植田村家百廿戸

人六百廿四人

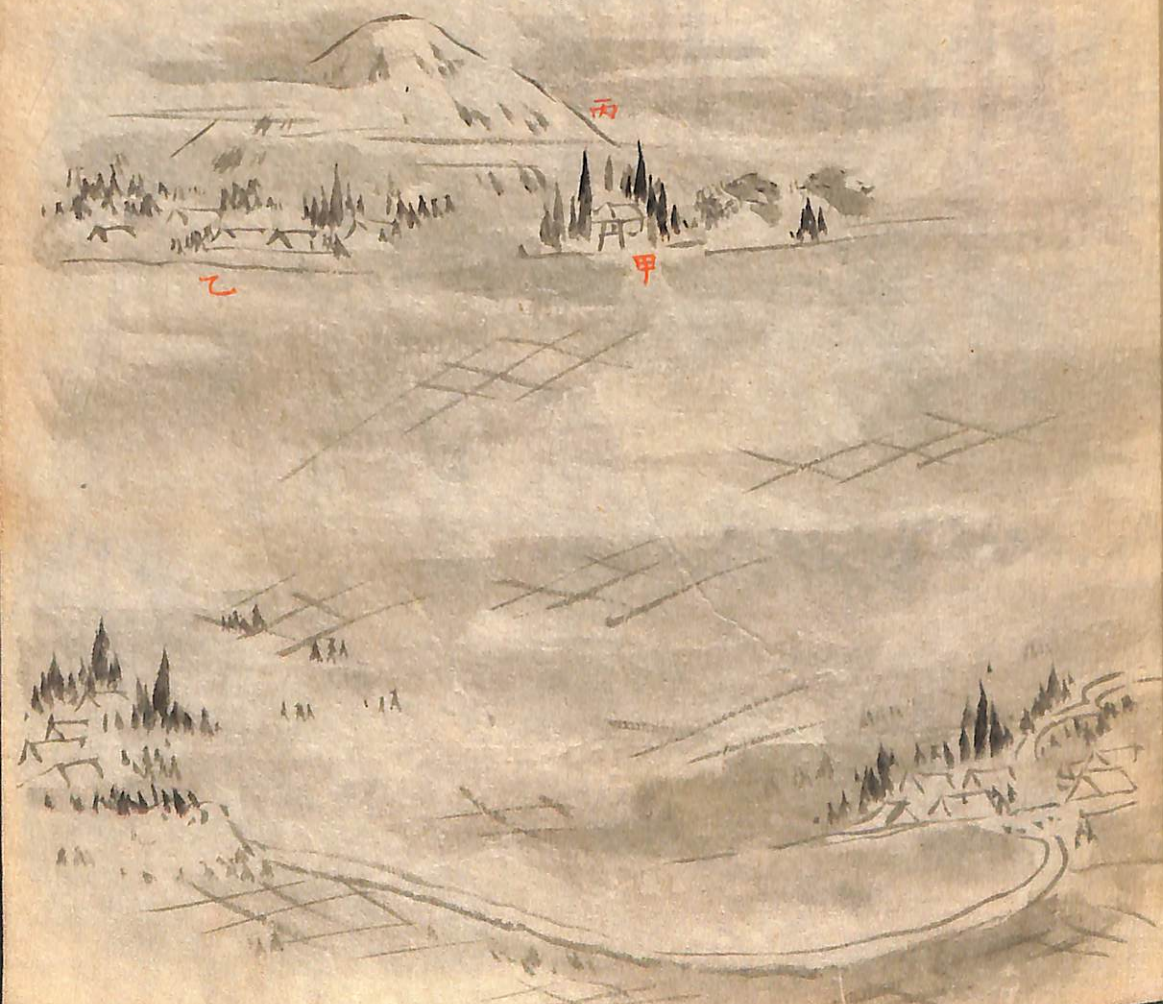
馬五拾一疋二

今日四月八日

（以下は非常に淡く、ほとんど読み取れない縦書きの文字列が複数行にわたって記されている）

○植田邑

高橋源三門が上祖より齋イナキモツなり
 甲 稻荷明神社の秋群乙 植田邑の
 表町よりありありとあるのす
 丙 鳥海、嶽（こゝろ）



大寒泉



3.



植田村

○守子寒泉

森、小清水をいづる事と
あつちからいづる事と
くちからいづる事と

植田村

上二橋村

下二橋村

いづる

此の所は清水の末に三つに分れぬ
その一つは真谷板倉といふ
清水の所は真谷板倉といふ
の水石持川といふ
はりて流て今宿村の高を
いづるに於て飲食川といふ
此の所は清水の末に三つに分れぬ
その一つは真谷板倉といふ
清水の所は真谷板倉といふ
の水石持川といふ
はりて流て今宿村の高を
いづるに於て飲食川といふ

四

甲

乙

丙

○東

乙

灰土門九郎堰といふ
其の所は清水の末に三つに分れぬ
その一つは真谷板倉といふ
清水の所は真谷板倉といふ
の水石持川といふ
はりて流て今宿村の高を
いづるに於て飲食川といふ

いづる



○ 小鼓柵

小鼓^甲城ハ植田村の表所の東世の間
護昌寺の裡^辛にあつた。凡そその度今も残つて
三百間もある。田畠と城まづ
城主ハ大石譽九郎定景と云ひて
小野寺家より四人の忠死の其一人なり



稻荷神社の
市神といふところ
こふまゝにいり
古き柱のりも
かゝる今も
奈るまゝいり
他多し 稻荷を
人まゝといふ

古四王、杜
真熊野、杜

己
田
野
村
の
一
戸
多
海
夏
院

庚
一日市村今不
羽端也
尺中



好。



甲 熊野ノ杜

此杜といひ 萬年神社
熊野ノ杜 七本杉とて大木のあり
二本ハ伐られ一本ハ枯れ倒れ
残り三本あり 乙丙丁
此三本の神杉を 残るる

乙 古四王ノ杜

此木の所 神ノ神明宮 雷ノ社
乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸



此假面むしと
四拾八面あり
といふ城主
大石氏の
寄贈する品
今ハ十三面
ありといふ
品ありき
此甲と市面
お作をいふ
まゝと春日
をいふや
凡人の
制作とも
おらぬ



○ 多寶院家藏



植田邑寄郷十二村

おあし

越前村

東方

里長

和兵衛

天平寶字三年、頃坂東八國並越前能登越後四國、
雄勝平鹿を併せ、郡を以て其世の越前のくあうとあとの末
が聖田の処あやとあもいづる此地の古のあやとあもいづる世の越前
國ある浅野の代より善右衛門の開墾し、この地を以て此地の村をせり
その由來志摩村の代よりあはれ日記に云う志摩新田に八左衛門海藏院村
の荒井八左衛門越前村の善右衛門大坂市陣のと紀院内の山口で
出むるひや出陣の巾着の多しといふこと追てこの地を須田美濃守
聞てこそけあげあも申せのくあやうあうあはれ仕へすつももどか君

の奉公あるをとおぼしめ命ある(田地新聖)てその勲功をあらは
まじしことおぼしむるに似れど戦場ありあふうる浪東に去
あふより大なる忠信末代まで高名なる先祖の末裔に當
べしとおもふよりこれより後いふ事ありこれより後いふ人
心をむきつけざる(てあるぞ)開きけらるゝと見えたり佐
藤善右衛門流江氏に無二れ忠信のそのおれ流江内膳難波
うろ死と聞て髪を切出家して杉宮善長を寺の弟子とあり名を
智傳坊といひて杉宮吉祥院の門徒して八葉山大日院のすずお
退轉ふ及るを興一達て寺号を慶長寺と呼ぶ今その大日
院あり是智傳坊が功をともく八葉山大日院の開山と云
察律師中興の師は宥貞法師長善宥快宥賢若善二翁

宥貞國福寺
他考あり宣圓

由和部連田の塾師寺に弟子とて俗生飯田勘右衛門の家より
出下正徳二年六月十七日入寂一同年秋八月十九日入寂あり

中より其寺今ハ八葉山慶長寺大日院とあり二智傳坊俗生と
下ニ橋市之壘が子に佐藤善右衛門家ハ長女次男あり此大姉ハ
下ニ橋市之壘が女より婿かへ貫ひて佐藤善右衛門と名れせ
家苗をさへ見えたる如く浪速中出陣のとき流江家より善
右衛門がそと出陣れ供とて軍役催促られ養父の云く智耳か
がも長女ハ嫁れ此家れ主より大坂出陣れゆとてそのも
やめておぼしめし若し無事飯陣にせしむる隠居して家やうき
疾もつづるしと澄人をさへ養をやりぬ大刀の一手も知ぬ其
の生きて戻らむ事ハ盲亀の浮木あるを此家てそと我ハ男を
せりあると心ふおもふ流江公うち死の御えられさへて

知得るうもれつむと人あられ其妻聲を揚て泣事うきりあし
丈飯^{ツベ}に髪を薙て尼法師ともなり亡霊^{ナキアト}をともむと一而
少思ひ定めて有つらむと智善石門^{チゼンシツモン}法江氏のうち死す太
刀をぬき戦場^{チバタ}より亡霊をとり法江公より賜りし下坂の鎧を
突て古郷^{コキョウ}の飯^イれ人々驚きさるる^サ立て無事をよろこぶ妻
もふしきれ思ひて悦ぶ事うきりあしそのとき杉宮吉祥院法
印快傳の弟子となり知傳坊より慶長寺大日院の開師となり
此事^{コト}前^{マヘ}も云ひしかくて後智傳僧^{チゼンソウ}出家を捨てその家を
て田甫^{タトコ}を新整^{シンセイ}せし営むとと嚴重^{イッソウシキ}き仰あれ養父^{ヤウフ}善右衛門^{ゼンエ}
次男^{ジノコ}を引きて隠居せり越前村^{エチノヘ}今有^{イマ}佐藤善右衛門^{サトウゼンエ}の智
傳切^{チキ}が末^{スエ}と此佐藤家^{サトウケ}の武器馬具の備もありしと上祖より

失せ今残りけりもの新古^{シンコ}の治定^{チテイ}あけきと 日の丸布^{ヒノマルヌ}の画^エける陣
幟^{セウ}模^モ五^イ五^イ三^{サン} 光絹^{ミツキヌ}地の菊^{キク}浦^{ウラ}の陣羽織^{チンウオリ} 下坂^{ゲサカ}の鎧^{ヨロイ}二つあり一助^{イチスケ}の戦
場^{チバタ}より法江公より賜りし今一助^{イチスケ}の上祖より傳ふ処にねあき具足^{グゾク}か
ねあき鎧^{ヨロイ}ありしが失^{ウシ}れりしと 平安城^{ヘイアンジョウ}國武^{クニタケ}のうちなる眉尖^{メギササ}力^{チカラ}
備前助^{ヘンノスケ}守^{モリ}りし短刀^{ミヅタナ}あきと今傳ふところかこふ越前
開^{ヒラ}れ田あり家も栄えり

越前村^{エチノヘ}本郷^{ホンキョウ}古^コ五十軒^{イハヒトケン}今四十戸^{イマヨニト} 上二橋^{ウニハシ}古^コ廿五軒^{ニハヒトケン}今廿六戸^{イマニハヒト} 四屋^{ヨウ}古^コ廿七軒^{ニハヒトケン}今廿八戸^{イマニハヒト}
八日市^{ハチカチ}古^コ廿七軒^{ニハヒトケン}今廿八戸^{イマニハヒト} 海藏院^{カイゾウイン}村^{ムラ}一戸^{イチト} 石河原^{イシカワハラ}村^{ムラ}一戸^{イチト} 坊^{ボウ}の塚^{ツカ}と子^コの塚^{ツカ}二処^{ニトコロ}あり

田字

あき 境塚^{キマツカ} 堰^ヱをこ 磯田^{イソダ} 甜めは 松塚^{マツツカ}
四屋^{ヨウ} 寛全塚^{カンゼンツカ} 大清水^{オホシミヅ}

神社

辨財天女祠

道祖神大日院
境内に初あり

祭日七月廿四日

神明宮村中の座り

祭日六月十六日

齋主松太郎二

高口稻荷明神社村中の座り祭日二月初十日八月廿別當大日院二

上二橋稻荷社

祭日四月廿日
別當大日院

三寶荒神祭日七月十七日齋主甚兵衛

宇賀神社祭主里長和兵衛二和兵衛祖ハ米澤和泉と云い武子
いり

総家負七十四戸

人負三百十八人

馬数廿九足

里長八左内門

海藏院村

東方

里長八左内門

此里長八左内門の祖ハ荒井三右内門と云生國ハ常陸國太田莊板
子と云父父の家守と云梶原義濃守殿の組下に云雅名を荒井

弥治郎と云い後ハ三右内門と改め数代忠臣の家と云あ慶長七年
壬寅秋此國ハ改遷封のとき中供の願ひ申し云バ義濃殿の仰り
こふ比大國より小國と云つてセ給ハ重き家と云残さるるの多し
と云ふ云 君の仰られいげれと云とも主たりしてはハ世あ存
ふべと云あきバこそ仰らるるのあはれ也又児の手解れ心もゆめ
さふと云どもて翌年大峯山に登り修行して海藏院と云山伏と云
君の御宗業を祈りなりやと云 ありむ跡を慕ひ奉りて出羽
國より平鹿郡植田村の末子丹野平内と云相知より此を云に
暫くありて此山伏と云きて 君はハ奉りて事いふと云あはれ
其ころ新関村より下り安久戸の邊田地中別當のよし慶長十二
丁年渡江公より仰をいふてや聞かれり子も中分地指領等

て牡丹も咲きし。又や山本部も牡丹の処なり。越後も牡丹
 山あり此海藏院の牡丹野邑今々なり。新所村アラトコ 三ッ屋村
高軒今六戸 今六戸 今六戸 今六戸 今六戸 今六戸
 本郷海藏院村石三軒 今六戸

田地字

斗之蓮花といふ

中ミナミ

高橋高橋

高橋高橋

總家負

人員

馬負

間野間野

志摩新田村

南方

里長

重兵衛

東に海藏院邑西に深太左馬村南に雄勝郡南村北に植田
 邑に此邑小郷ゆゑ享保のころに此邑で植田村の枝郷なり。今々
 あり。越中国志摩八左門より浮浪人植田村より来り此

邑を新整佃多し。其志摩新田とも志摩新田ともいふ。後名
 抄に越中国新川郡志摩新田八左門より新川郡の人を考ふ
 續紀に光仁帝のころに宝龜七年五月に戊子少羽國志林
 村の賊叛逆與國司相戰官軍不利癸下総下野常陸等國兵伐
 之云々といふ。其志摩村の志摩と志摩志摩と書て國々
 処々といふ。多々名に此志摩村の田堰に水上へむ。雄勝郡
 岩崎の田中に在り。長嶋の水を深井下堰深太左馬植田此志摩
 新田五村の水よりしが今々その末の間野清水を以て佃といひ

田字

志

ぬるめせは

ある川は

は村にきこりし志摩八左門の後佐藤八左門とてあり

神社

神明宮

祭四月十六日

別當植田村多寶院

稻荷社

〇 〇

山神社

〇 〇

惣家負十六戸

人負七十人

馬負七疋

露の旭

今泉村

南方

里長

茂右衛門

此村の東を志摩新田西下堀南に幡川北に谷地新田に枝郷あり
羽場村処々あり此より西に川欠ヶ谷とのやれ処を以て常村
むろ城下なり時の所なり処を以て浅舞村を始に地名多し
館前城跡に城まれ名を菊池采女正といふなり新所村 中

嶋村 三ッ屋村 駒引村むろ館前村の八幡宮に中前近きあり

うちり人なる落馬しけり人なる思ふ馬を下り曳行なりしうへ

駒引の名ありといふ事ありある馬引ともいふ事ありといふ人

あり又なる幡宮の神事なり月十五に都れ駒むろに今や

引と望月乃駒と子歌なりなり駒曳て神の事をしをり

いふめづりき城まのふありいふこと事ありありけり

真南 下今泉 一関川岸より此村寶永王正徳始あり絶て

今あり 大村五十戸あり河前といふ此大邑郡記に見えたり村に

新三ッ屋六戸此邑も郡記に見えたり今泉といふ村を國々

より多しあり名に

今泉の城主を菊池采女正といひ今泉太郎左門尉といふなり

それとあるに――永慶軍記廿七卷小野寺湯澤返改事所岩
崎城攻事とあるにふふ小野寺遠江守岩崎の城を攻むといふも
六郎兵庫頭心替寺原田大膳軍より打勝て翌日取上り註進を
て義道父子とせせそのとも下知しければ思ひは踏止る事と
引退けバ湯澤勢勝の衆より攻めけり此時横手勢悉く追討ぞ
せられあはさるる大嶋を退き森山の麓あり本陣を
支へるり湯澤勢猶も小野寺の本陣を追立と襲ひ来るを
横手勢の中より植田の典九郎黒澤嶋今泉太郎左衛門尉
持藤九郎取て返――大勢を燕橋雄勝郡湯沢より
森井へ行通ありにやて防ぎ止む
時をうけて戦ひに手れものども四人討死し人のせり
遂に討死せし餘人のその其の討死の支へられ燕橋を越

えざる間小野寺備を固く直す軍は是より豊前守も湯沢
小阪陣より小野寺も細砂川を渡り植田にぞ引寄せける物也
今り討死せし中今泉太郎左衛門といふ者れ父先年矢嶋合
戦に山北勢敗軍して山坂を引取り折部郎今泉の尻將少引
けるが敵それまで追せりけれども臆病の癖やむ矢叫の音耳
をきあれば恐るる限りあるも馬を射させ歩立あり――足
あえて腰立ど匍は坂を上り引けるが家人ともものる目と耻しく
や思ひけむあるきて行するが匍はるるを早けれまかく匍は下知
りて後それ笑のふく成りけし此者遂に一生の間首高名
をもせざりけるが元亀の頃最上還賜の戦ひに流し矢の中りて死
をせりやかは臆病の者れ子あれども太郎左衛門も高名揚敷

其かこれなく今忠死を遂に事す惜しかりけりと思ふなり
今泉太郎左衛門尉の父と云ひハ菊地来女正女と云ふ菩提寺に
龍泉寺龍川寺とも云々古き真言宗之雄勝郡杉宮吉祥院の
門徒より慶安の頃までせり行ひたゆまざりしが中興の祖快嚴
阿闍梨元禄五年壬申九月九日示寂此快嚴遷化の後其法
行僧カウシもあつて寺も少くあれうせて今其名れいぞ残る此寺
は享保天文の頃ハ衆僧住して昌ハシ元亀の軍より父を流失アタリ中
死其子ハ文禄の戦に忠死してより大檀那無く寺も轉々思われ
多り中嶋村ハ無縫塔あり此石面ハ権大僧都快嚴法印と云ふを

神社

八幡宮社地土間 祭日八月十五日

別當 法全院

雷カミナリ社ハ幡宮末社ニ祭日三月十五日共ニ館前カミナリ座カミナリ別當おあり
両頭カミナリ權現カミナリ社祭日九月九日下今泉カミナリ座カミナリ別當おあり
稻荷明神社 祭日三月十九日 別當おあり
竈カマド大明神カマド社祭日六月十九日九月十九日別當同院ニ 神樂歌カマドハ豊トヨ竈カマド
と見ゆいとも重きおあり神ニまつゑと邊津ツ火カマドの義カマドあといり戸津ツ
火カマドと民戸をいといり出羽の人と云ふ家屋カマドを竈カマドといふはつてり

田地字

朝日野 駒込カマド 寺田カマド くらばカマド 左カマド海田 首カマド
蒲出 本城 起カマド 大明神田 真カマド角 河原田 上安久戸
中野 中谷地 太郎四郎カマド 太郎四郎ハ菊地妻北子ありといふ今泉太郎左衛門の
法全院由来

修驗者正寶山法全院の鼻祖と寶龜天皇ミヤコトたこれころあやむ其を
一のさぐらふべしとあことかきりし君と皇都より藤原光重朝臣と
まをいへる人おのりしきき多しとてこれとあうさそく一歩き
此處におりし人を止めさるせし一日二日とあうし奉る手おとれ
こよかう養愛メデタければ里の童ふとのあうせはあうし此處お末永
やめめあせし人より進め奉れ唯いふやもとて童ふとのあうせ
信ふまじし子と多くあれややしも暮あしとまやうら春あしり
て此郷の鎮座ハ幡宮の別當なる家とあうし幸ふ此光重卿を神
官とてまゝ何人への娘を娶て市子にまゝ胤繁榮て藤原光重の
時世まり神職とてうち續き三代目相模守の娘を雄勝郡山崎
ある手妙見園城主原田大膳某殿の祈願所寶覺院とて修驗

者の室よりし処の寂上勢のまゝ山崎城おとれそのとき寶覺
院とて原田殿を具してみちれふ落行とて其妻を外舅相模守
のまゝに返し仙臺路といふと石巻の湊あうしかくちあじといへり相
模守二代目大和と申さる早世し胤家子あきゆゑさうし山崎より
戻り居つる娘お智チとて親族あはさうし進めぬれど此娘様正
しきまのにて子さし有は中とて智のこといふさうし肯カヘこころあうしとせし
まべあうしちれく人を走せ石巻に在る寶覺院をむくといへり
如く娶ぬ此とき相模守が家二代目の大和早世ゆゑ修驗道に轉りぬ
大祖藤原朝臣光重卿の後胤三代相模守某のとき此修驗の
家といふれどその大祖世まりハ某百年経るといふ事家譜ある
あうし此後氏の家といふる寶覺院を創るとせり

修驗家開祖 寶覺院宥泉寛永五年戊辰二月廿六日八十五歳遷化

二世吉重院宥快寛文七年丁未九月十五日七十九歳遷化 三世吉

章院宥證元禄五年壬申正月十九日八十五歳化 四世安養院宥應元

禄十年丁丑十月十六日六十歳化 五世法善院安昌六十五歳化此安昌

院宥應の舎弟海藏院といふ雄勝郡嶋田村掠多地いふ所を

以て一院建立當時永院号教學院とすを此の寺に當寺の末

二 六世吉重正應寛延元年己辰正月廿六日五十八歳化 七世寶全

院宥專寛政十年戊午三月廿七日七十一歳化 八世吉壽院大慶文化

九年五年戊辰三月三日六十歳化 九世當住天龍院宥貞号す

後住觀明坊号す

當寺末山雄勝郡嶋田村教學院開基は法全院五世寶善院舎

弟海藏院に

此事五世の條に見えりす海藏院村の海藏院と違ふことあり

永泉寺

寒梅山永泉寺は今寺田といふ地に建し寺に今の地は寺うけり

て後寛保の年一圓禄て由來さたりあり

削山は天徳十世久山笑欣和尚寛永十六年乙卯七月二十日遷化此今泉の永泉寺末

分明サカカありしゆを傳法中絶して天徳寺より傳て同寺より久山

笑欣和尚の靈を勸請して一洲派の傳法せし其時のありけり

元禄二年己巳四月三日天徳寺明由代印永泉寺孝普長老

とあり此孝普長老は永泉寺の世代に見えり本に其僧臨濟

おとし改名せしあり當時廿代現住竺峯良仙和尚に此寺鎮

守の辻 諏訪 白山 鹿嶋一社神事九月 祇園神事六月十五日

総家負百四十戸 人負六石七十九人 馬負五十四足

やちやま

下堀村

西方

里長

吉右衛門

東ハ陣場

別明ベツミヤウ

真南西雄勝郡嶋田高尾南ハ雄勝郡

飲食川流シラキ北ハ福嶋フクシマ家十戸斗あり文化三年ハ福嶋開リ西野下今泉

神明宮

祭日九月十六日

秋葉江三月十日

彌陀勢至觀音

祭日三月十五日

別當 安樂院

愛深明王

祭日六月二日

別當 同院

下河原稻荷明神をもの川向の方ハ祭日六月廿日昔別當おちト

安樂寺

修験者八福山安樂寺開祖々法樂院快永貞享四年丁卯正月廿五日迄 二

世安樂院宥等

享保三年戊申十月廿日

三世大教院宥廣

寶曆六年己未六月廿日

世安

樂院宥竹

文化六年己未六月廿日

五世當住長賞坊快光

圓通寺

曹洞派霜下山圓通寺ハ雄勝郡三梨村の求山ハ當寺開

山をまゐはち桂園寺六世清室金老和尚ニ元和年中遷化世代

現住さぶらゐハ小寺ニ

きんの下

真木村

西方

里長

與治右衛門

真木も多ク名ニ此邑むハ家七軒あり今ハ高世三石五斗

六外六合ハ處里正一戸ハ人九人あり一村一家もずハ世ハ希ある

その善提所ハ下堀村の圓通寺祈願所ハ今泉村の法全院と
いり本居の宮とあり

西頭權現社 祭日

今泉村 法全院

社地東西十間南北五間西ハ街道限リ東ハ畑限リ北ハヤキ限リ
南ハ屋敷限リと云む一寺もあり也寺ヤキ字あり
此西頭權現ハ薄井村をばよ今泉村その外にも聞えり此あり
と云西頭多うる処也や去年の夏も澤木山より西頭の三斗
ある蛇骨を捕じ人ありと云おのれ四尺けあり西頭ハ蛇見
一車あり西頭の蛇ハ一種を吞けりこさるから一頭ハ眼の
ときけりまゝ尾ハ頭の出もあり自然の西頭なりまゝ雙頭の
蛇もありと云り

花のハナ草

別明村

西方 里長植田村伊兵衛兼

別明邑ハ東ハ植田あり西ハ下堀南ハ今泉北ハ真南^{今泉の}享保日記
ニ家負せ三軒今九戸ニ

神明宮 祭日四月初日

別當今泉法全院

阿弥陀佛社 祭日三月十五日

別當 同院

八幡宮 祭日八月十五日

齋主惣右衛門の内神ニ

田ノ字

下谷地 まゝ霜谷地と云あり

家九戸 人三十二人

馬四足

稲葉の森

谷地新田

里長

善左衛門
乙松

谷地新田八ヶ村と云ふ者 一家三戸 樋場三戸 河原村八軒

今三此村慶安三年を創といひ 茨嶋古廿軒 今五戸 横戸今五戸 横戸今五戸 本孫馬住あり

中村古廿八軒 今廿八戸 慶安四年始り 下モ村ナリ小松興作開キ 根本場古廿四戸 今五戸

明暦三年ニ始此邑より根本ノ物を堀り新せり 田邑根より至

て其品方より堀り跡を水と深くして身をおろす事あり思ふ

へき交之 沼田古十三軒 今廿五戸 明暦四年ニ始 桑木古十五軒 今十三戸 此邑里長七松

栖家リ

神社

山神社 中村の座り 祭日三月十二日

辨財天社 茨嶋村の座り 祭日三月三日 齋主 仁右衛門之

神明宮 祭日 齋主 七木善左衛門

八幡宮 沼田村の西あり 廣野の座り 祭日八月十五日

廣野を八幡野といひ 祭日八月十五日 別當 大行院

末社 神明宮 大日如來社

大行院家記曰

棟札 若宮八幡宮寛文四年甲辰開基 通師寶鏡宥遍寶

珠山若王寺 大檀那戸村十太夫 願主 佐々木土作 小松興作

社地 横廿四間 其時無別當

本殿二間四面向未申むり 社領五石一升七合あり ありをいひ

貞享三年丙寅四月本殿再建立 導師西馬喜内村明覚院と見えり

家負百七戸 人負五百廿八人 馬負五十疋

花柳

西野村

成方

里長 三郎兵衛

郡邑記云、西野村家負廿九軒西野、村云郡村改野字除カル
 西々大河向中嶋ラン場河原云當邑地形ニ氏神社有リ新川向一本
 柳河原云処有リ右河原小市藏入畑高有リ南西々大船ト口川ト
 有リ此處雄勝郡嶋田村と右川ニ境夫ヨリ下モ山岸鶴巢村と云處
 正保年中梅津半右門開出地鶴野巢ノ内ニ當村山有リ同郡大澤
 村ヨリ西馬音内邑、街道ニ境大川境の義々川並度々變々故實説
 難定と見え、枝郷 八口村 古六軒 今八戸 省柳村 古六軒 今六戸 正保五年
 羽立ニ 上海村 今七戸 三ッ屋村 五戸 白田村 七戸 悪戸村 六戸
 神江

藥師佛ノ社

寺村の壁リ

癸日三月八日

稻荷明神社

上海塚ノ座リ

癸日三月三日

浄土院

此修験者退轉セリ今上海塚とあるハ浄土院の祖かとの塚也

西光寺

日庭山西光寺ハセト平僧寺少ト四五世経々々増田村

枝寺ニ改メ増田北満福寺ノ七世食室天悦和尚開山尊師

とセリ天悦和尚 元和五年己未二月二日 二世得應禪髓和尚 延享三年丙寅二月廿

三世龍水正峯和尚 延享四年十月二日 四世通貫本宗和尚 天明七

十月廿 五世透屋祖閑和尚 寛政三年辛未十月廿九日 六世大林本洲和尚 永

七年戊戌八月廿七日 七世月心天髓和尚 寛政五年癸丑十月十日 八世正全覺明和

尚 尚 年月不知境遷 九世大嶺抵雄和尚 文政八年七月三日 十世一常泰

圓和尚

文政五年壬午正月
立田成於永傳寺代

二世天良運和尚當時現住

平僧寺時世前住

二世通庵宗達和尚延寶五年丁巳
九月化

三世了達

存智

元禄五年壬午
二月丁未日化

三世國岳梁全

寶永六年己丑
六月十五日化

五世實公羽丹山享保五年
甲寅九月三日

化二

田地字

ハッ口

雀柳

上ノ野

一本柳

館堀向

家四十六戸

人二百四十八

馬二十二疋

常野村

里長

藏松

東谷地新田村西邊地村南ハ西野村北ハ作山村ニ郡邑記常

野村家負世軒常野、村云野ノ字改除ハ寶永元年雄勝郡山田

村ヲ藏人ト云者移リ入り云々ト見えヨリ其後ありける

稻荷社村の東ハ座リ祭日三月九日別當柏木村光正院

田地字

堤下

家九戸

人四十七人

馬五疋

源太左馬村

里長

與市郎

源太村ハ北ハ在リ左馬村ハ南ハ在リ南北村の間ハ凡一里斗隔

テ二郷村ハ邑名呼ニ二合一村ノ村ハい多クけきどかく遠方放テ

たりハ希ニ源太左馬トモ書ヨリ

郡邑記：家負拾軒慶安年中源太ト云百姓開故村名ト云九馬
村同八軒左馬ト云百姓開故村名ト云源太左馬ニ改ル云と見えり
享保日記云三ツ村家負八軒とあり此村今と絶り
此邑享保日記あり享保の後始り一村あり

石河原村ハ
古名三ツ屋ニ

稻荷明神社 高石原ト云三ツ屋の村跡あり 源太ノ齋ヲ

神事三月九月 源太ノ後ノ長石河門ト云猶あり

左馬稻荷神

此邑ハ左馬七石河門あり

田地字

大角 不ノ地 一木柳 狐塚

家負二十四戸 人負百十二人 馬負十二足

本下村

里長 新助

木下村古名木野下村ニ 本郷今十三軒 支郷 澤田今八軒

小澤今ハ上ノ村ト云今三軒 市藏前今十二軒 後ノ村六軒此村今ハ退轉

サリ 木下今ハ甚兵衛ト云 木下村東ハ鍋倉村西ハ源太村南

ハ植田村北ハ樽見内ハ云々

日光ノ社 祭日四月八日

齋主 治兵衛ニ

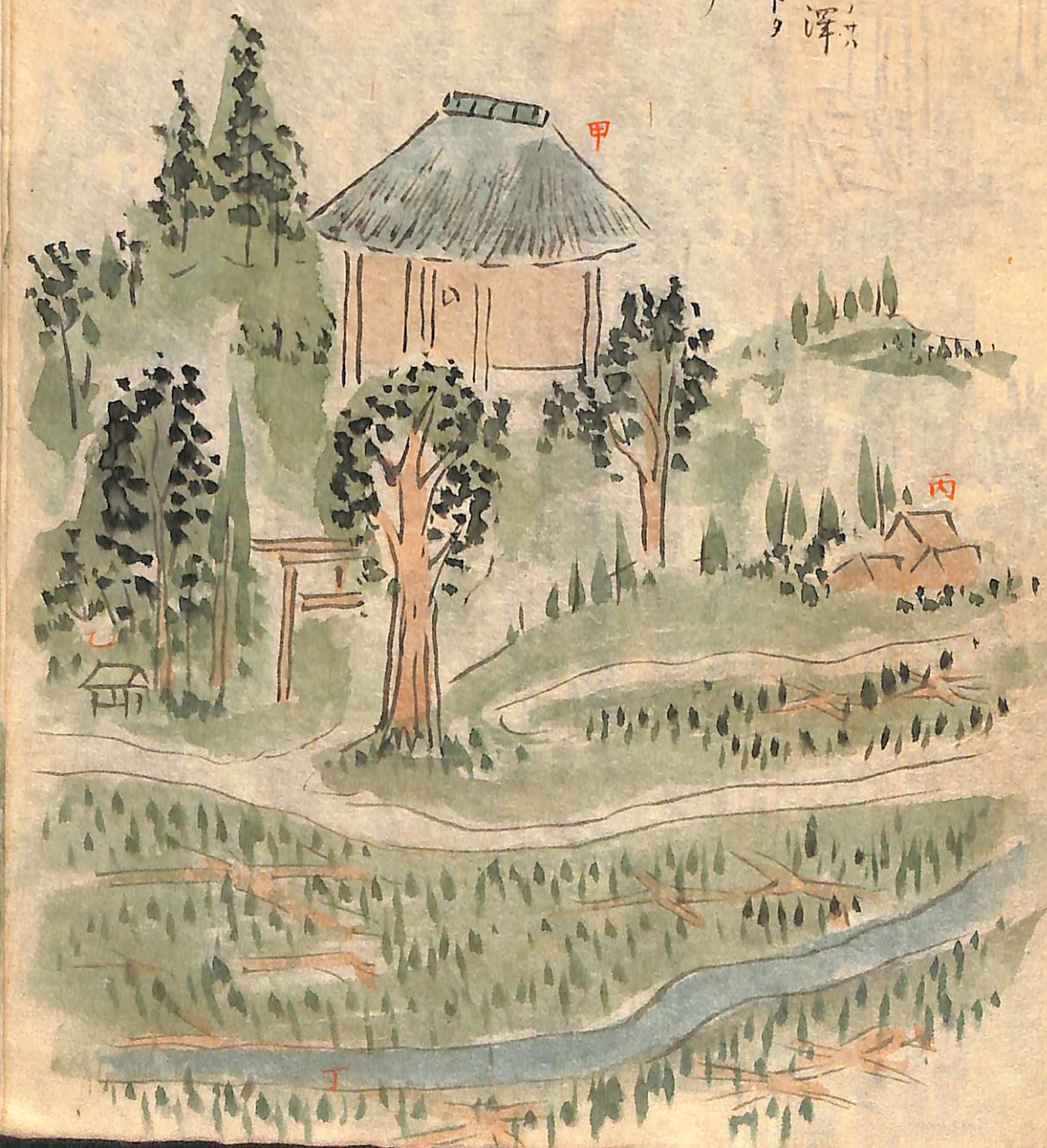
水上ノ字

所人ハ 妙法 水神 まなひ 石持川

深間内 横清水 さり揚ケ 外ノ田 馬場尻

民家四十九戸 人負二百三十八人 馬負廿七匹

阿波陀佛ノ社^甲津のぬゝ
参^乙白 末社小
道祖神^乙マ^丙村々^{ヒハヒノサハ}呼澤
マ^丁杉ノ下々^下道^下下々
田の中^丁か石持川^下流々



あつた〜〇〜し
讀し難し

谷地村^甲八幡宮むろ
戸村^乙庭立^丙少^丁稲田
寄^戊所^己あり〜とこ
いし^庚神^辛さび^壬〜とて
ち^癸の^甲齋^乙板^丙小^丁松^戊の
ホ^己の^庚寄^辛生^壬あり
大^丁日^戊め^己来^庚の^辛祠^壬あり
長^甲床^乙舎^丙の^丁内^戊の^己神^庚明^辛宮^壬
ヲ^癸サ^甲セ^乙



谷地ハケ邑内^丙根子村とてあり
 此とやとこのありてハ陸地と
 そのむろをみて田村の根子のぬく
 とも土^ネ薪^コてふとものと堀^甲村のぬ
 田村の品^ミ方^ホまき^マの根子^ネ堀^コ
 得^エる^ル^シ^ミハ^サ八^ヤ尺^シありハ七^ナ尺^シ
 多^タあ^ハる^ルや^ヤあり^リや^ヤあり^リふ^フべ^ベ
 う^ウあ^ハる^ル



